

町内のお祭りがあった晩、打ち上げと称して公民館には大人たちが集まっていた。

と言っても子どもたちを家に帰した後に集まったのは三十代から五十代の独身のおじさんばかりが五人。それと同じく、未婚の私。

普段は子どもたちが集まりテーブルゲームなどで賑わっているこの会館が今はアルコール臭い。

部屋の真ん中に置かれた古い木のテーブルは汗のかいたビールグラスで色を変えている。

「若い頃はな～、一晩で何回も発射できたんだけどな」
「射精したあとに無理やり腰振り続けてそのまま勃起させるのがたまらないんだよな！」

(なんて話してんの…、最悪)

アルコールで下品に弾む会話。

日頃全く関わることのない人たちだ。正直、名前だっ

で覚えていない。そんな相手に何を聞かされているんだろう。

今日だって本当は母がここにいるはずだった。体調さえ崩さなければ。

……この人たちはここにいたのが母だったらこんな下品な会話はしなかったのだろうか。私が彼らより若いから舐められているのだろうか。

「イった女のまんこの中、こじ開けるようにピストンし続けてやるんだ」

「同時にクリも刺激してやったら泣いて喜ぶぞ」

(ほんとやめてよ……これだからジジイは)

心臓がきゅっと締め付けられるような。

耳が熱くなって、それから下半身が熱くなって。

むずむずする。

私はごまかすように麦茶を飲んだ。ごく、と喉が鳴る。

「夢子ちゃん大丈夫か？」

「大丈夫です」

大丈夫なわけない。

だっておじさんたちのする話は……。

経験のない私の頭の中をいっぱいにしてしまう。

いつも布団の中でスマホ片手にオナニーするしかない私の頭の中に、新鮮な刺激を与えてくるのだ。

実家の近くで一人暮らしを始めてから、アダルトグッズもいくつか買った。

だから本物を受け入れたことはなくても、シリコンを挿入したことはある。クリトリスと一緒にいじればそれなりに気持ちよくもなるし。

でもイったおまんこの中、こじ開けるようにピストンするなんて自分ではできない。イった後はくたくたになって何もする気が起きなくてそのまま寝てしまうんだから。

どんな感じなんだろう。

ふわふわとまどろんでいる絶頂の余韻の中、ちんぽで突かれ続けるのは。

(……っ！！ だめ、今は考えちゃだめ！)

思わず頭を振った。

想像だけでクリトリスが存在を主張し始め、おまんこがじっとりと開いていくのを感じたから。

自分でも分かる。発情するようにそこが疼いている。

(帰ったらオナニーしよう。今日は頑張って騎乗位でや

ってみようかな？ この前も前後に動いたらちゃんと中も気持ちよかったし……)

ふと、顔を上げた。

テーブルを囲んでいたおじさんが一人、私を見ていた。

「夢子ちゃん、こういう話、興味ある？」

他のおじさんたちも一斉に私の方を見る。

突然の問いと視線に体が凍りついた。

「は、はあ…？」

「さっきから何度も不自然に麦茶飲んで……。しっかり聞いているんだろ？」

「何言ってるんですか、これセクハラですよ」

「でも興味津々って顔してるぞ」

私は口を開けたまま止まってしまった。

誤魔化し方が分からない。

「それにさっきから太ももをぎゅって閉じたり開いたり……、おまんこ疼いてるんだろ？」

「！？」

隣に座っていたおじさんに言われて思わず座布団の上で正座を崩した。

そんなの気付かなかった。無意識だ。

こんな場所でおじさんたちに囲まれながらオナニーみたいなことしちゃうなんて。

「興味があって当然だよ。気持ちいいことはみんな好きなんだから」

「そうそう、悪いことじゃない」

「もしかしてもうパンツの中は濡れてるのかな？」

「おじさんたちの話聞いて興奮してきちゃった？」

「や、やめて……」

顔が引き攣っていく。

普段からえっちな小説や漫画ばかり見ている私は、この後を想像してしまう。

「でも夢子ちゃん、呼吸が荒くなってるぞ」

そんな、フィクションみたいなこと起きるわけない。

「このまま想像だけで済ませていいのか？ それともおじさんたちに気持ちよくしてもらおう？」

ごくり、私の喉が鳴った。

「夢子ちゃんも気持ちいいことは好きだろ？」

興奮してしまっている。

下着の中も濡れてる。

それに、私を囲むおじさんたちの視線から逃げられない。

かすれた声が漏れた。

「それは……、す、好き……です」

「よしっ」

私はその言葉を発してすぐ、心変わりしないうちに、
ということなのだろうか、おじさんたちはこれを待って
いたと言わんばかりに慌ただしくテーブルを移動させた。

それと同時に座布団を並べられ、あっという間に私は
そこに寝かされる。

すぐにおじさんたちに囲まれて見下ろされた。

緊張で頭が真っ白になる。

何をどうしたらいいのか分からなくて体が動かない。

「緊張してるな、大丈夫だよ、おじさんたちに任せて」
「まず脱いでどうか。上からな」

上半身を一人に抱かれ体を持ち上げられると他の誰かが私の腕を持って、また他の誰かがTシャツを抜き取った。中のキャミソールまで一緒に抜かれたみたいだ。

続けてブラジャーのストラップも肩から外され、背中のホックも外された。

硬いワイヤーが胸に当たり乳首を掠め、これもすぐに取りられてしまった。

恥ずかしくて隠そうとした腕は両側から手首を掴まれ座布団に押さえつけられた。

「おっばいかわいいな」

「触らせてもらおうよ」

「あ…、」

両側から伸びてきた手。

それが両方の胸を包んだ。

初めて他人に触られる。おじさんの硬い皮膚が私のやわらかい脂肪に触れている。

脂肪はその手の中で形を変えた。

「もう乳首勃ってるなあ」

「ここ触ってみようか♡」

包んだ手のひらから指が伸びてくる。

「はあ、はあ」

「あはは、夢子ちゃんしっかり興奮してるな。ほら夢子ちゃんの乳首、おじさんに触られちゃうぞ♡」

脂肪から離れた人差し指が。

私の乳首を両方、乳輪から先端へとなぞるように。

すり♡

触れているのか触れていないのかギリギリの感触で撫でた。

「あ…ツツ♡♡♡」

ビリッ♡♡

乳首から背中へ痺れが走る♡

「おっ、気持ちいいか」

「嬉しいなあ、もっとしてあげるからね♡」

すり♡

すり♡

すり…♡

すり…♡

乳輪から先端へ、指が離れるとまた乳輪へ戻って撫で上げて…♡

それを繰り返されて、私の体は座布団の上でビクついてしまう♡♡

すり♡ すり♡ すり♡ すり♡

「あっ、あ♡ あ♡ あ♡」

指が滑るたび、体が引き攣るような感じがする♡

自分の意思とは関係なく胸を突き出し背中がパタパタと浮く♡

すり…♡ すり…♡ すり、すり、すり♡

指は遠慮がなくなっていった♡

かすめるだけだったそれははっきりと乳首に指の腹を

当て、乳首の勃起を促すように撫で上げ続ける♡

「あっ♡ んっ♡ あ♡ あ♡」

乳首、痛い……♡♡♡

初めての刺激に興奮して勃起してるのに、それでもまだ勃とうとしている♡♡

血がそこに集中して流れ込んで敏感になっていく♡♡

すりすり♡ すりすり♡ すり、すり♡ すり…♡

「あッ、うあ、あ♡♡ っ、は、あ♡♡」

「気持ちいいだろ、他人に触れるのは」

「気持ちいい、です…っ、」

正直に言ってしまった……♡♡♡♡

「よしよし、いい子の夢子ちゃんはここも一緒にしてやろうな～♡」

一人が私のワイドパンツの紐を緩め、性急に抜き取った♡

そのまま足を広げられ体がそこに入ってきた♡ 足が閉じられない♡

「お～……♡ ぐっちょり濡れてるじゃないか♡ 夢子ちゃん経験少なそうに見えるけどむっつりか？♡♡」

そう言いながら指が下着をなぞる♡

少し押し付けられて、下から上へと往復して割れ目をなぞり、その指は……、

「あゝ ツツ♡♡♡」

クリトリスを押さえた♡♡

「ここだな、夢子ちゃんのクリちゃん♡♡ ぎゅーって押しただけでトクトク脈打ってるの分かるぞ～♡」

「あっ、あ♡♡ や、っ♡ ああっ♡」

「日頃クリオナばっかりしてるのか？♡ こんなに敏感だなんて……♡♡」

さりっ♡♡

その指が小さく上下に動いた♡♡

「んっ♡♡ ア♡♡」

さりっ♡♡ さりっ♡♡ さりっ♡♡

下着の布の感触と、それを上から押さえつけ擦る指の感触♡♡

「あっ♡♡ あんっ、♡♡ あアっ♡♡」
さりさり、さりさりさり♡♡
クリトリスはおじさんの太い指でそうされながら、
すり♡♡ すり♡♡ すり♡♡ すりすり、すりすり♡♡
乳首は勃起だけを繰り返す撫で上げられる♡♡
「うあッ、あ♡♡ ああっ♡♡ あ♡♡ あ♡♡ あッ♡♡
♡」

乳首もクリトリスも一緒になんて、自分じゃ絶対にできない♡♡
体験したことのない快感の大きさに一気に興奮していく♡♡

さりさりっ♡♡ さりさりっ♡♡ さりさりっ♡♡
「夢子ちゃんのクリちゃん膨らんできたぞ♡ パンツにくっつき浮いて、触ってーって言うてる♡」
すり♡♡ すり♡♡ すり♡♡ すり♡♡ すり♡♡ すり♡♡
♡♡
「乳首もビンビンだ♡♡ こっちも触ってほしくてこんなに尖ってるんだよなあ♡」

「あッ♡♡ あ♡♡ あッ♡♡ ……や、ア♡♡ あっ♡♡
こんな、……っ♡♡ こんなの、……だめっ♡♡ あああッ♡♡」

この信じられない状況に一気に昂って、押さえつけられたままの手首が座布団に沈む♡

ぎゅっと拳を握るとお腹の下に力がはいて、足がピンと伸びて♡♡

これは知ってる♡♡ イく前の、一番気持ちいい状態だ♡♡

「あッ♡♡ あゝ、あゝ っ、あ♡♡ ………ッ、だ、め、………っ♡♡」

「イきそうかな？♡ いいよ、夢子ちゃんのイってるとこおじさんたちに見せてごらん♡♡」

さりさりっ♡♡ さりさりっ♡♡ さりさりっ♡♡
すり♡♡ すり♡♡ すり♡♡ すり♡♡ すり♡♡ すり♡♡
♡♡

体に熱がこもっていく♡♡♡♡

お腹の下から、太もも、足先まで、ピンと張って♡♡

「あゝ ……ッッ、だめっ、んあ、……あゝ ……………っっっ！！♡♡♡♡♡♡♡♡」

びくんっ！♡♡♡♡

体が跳ねた♡♡

それから突っ張っていた体から力が抜けて、大きく息を吐く♡

「かわいいなあ、まだ指でしただけなのにイっちゃったか♡じゃあクンニはどうかな♡♡」

クリトリスを擦っていたおじさんが手早く下着を抜いた♡

恥ずかしいと思う間もなく、おじさんの指がその肉を広げ、

ぢゅ…っ！！♡♡♡♡♡

クリトリスを唇で覆った♡♡♡♡

「…………っっ！！♡♡♡♡♡」

足が大袈裟に跳ねる♡♡

いったばかりのクリトリスを覆った唇は、すぐにきゅっと締まった♡♡♡♡

ぢゅっ♡♡ ちゅう、ちゅうッ♡♡ ちゅぷっ♡♡ ちゅく、ちゅく、ちゅくっ♡♡

「ん` あッ、あ` っ、あ` ♡♡♡♡ まって、え` ♡♡ まだ、……ッ、あ`

ああッッ！♡♡♡♡♡」

「指よりも唇のほうがやわらかくて気持ちいいよな、乳首もしてやろう」

「あッ、うそ、………う` ああああッッ！！♡♡♡♡♡」

ちゅっ♡♡ ぢゅぷっ♡♡ ちゅ、ちゅ、ちゅ♡♡ ちゅ、ッ♡♡ ちゅむちゅむちゅむちゅむっ♡♡♡

クリトリスは優しく粘膜で揉み込まれ♡♡

ちゅぷ♡♡ ちゅぷ♡♡ れろお♡♡ れろれろれろれろっ♡♡ ……ちゅくっ♡♡ ちゅくちゅくちゅくちゅく…っ♡♡

乳首は吸われ伸ばされると、舌で弾かれ、また吸われた♡♡

「………ッ` ！！♡♡♡ あ` う、……っ！♡♡ く、……っっ！♡♡♡♡」

オナニーはいつもイってしまえば終わりだ♡♡

その先なんて知らない♡♡♡

それでも、手首も足も押さえつけられ、おじさんたちに囲まれ触られ続けていると、

「あッ♡ ん……っ♡♡♡ あぁあっ♡♡ イったばっか、
なのに……！♡♡♡♡」

興奮がおさまってくれない♡♡

自分の体を他人に明け渡し、快感を与え続けられることに喜んでしまう♡♡

ちゅむちゅむっ♡♡ ぢゅ、ぢゅぷ♡♡ ちゅっちゅっ
ちゅっ♡♡ ちゅ〜〜〜ッッッ♡♡♡♡

おじさんの唇の圧で潰されるクリトリス♡♡

れろれろれろお♡♡ れ……ろお♡♡♡♡ ちゅくちゅ
くっ♡♡ ぢゅッぷ♡♡ ちゅくちゅくっ♡♡

舌で擦られ、窄めた唇の皺で挟まれ吸い上げられ伸ばされる乳首♡♡

「やゝ、ぁぁぁ、また……！♡♡♡」

体が強張る♡♡

芯から熱が沸き上がってきて、お腹が重くなって♡♡
♡♡

自由に動かせない手は拳を握り、足も指を丸めた♡♡
♡♡

「う、うそ、……♡♡♡♡ また、イっちゃ、♡♡♡
♡」

「夢子ちゃん、上向いてごらん♡」

私が自分から上向く前に、頭の上にいたおじさんに顎
を掬われた♡♡

そして状況を理解する前に唇を塞がれた♡♡♡♡

やわらかい唇が唇を塞ぎ、一瞬呼吸の仕方がわからな
くなる♡♡

それすら私の興奮を煽った♡♡♡♡

「……、っ♡♡ ～～～～ッ♡♡♡♡」

喉をそらし、乳首を吸い上げられ、クリトリスは潰さ
れる♡♡♡♡♡

ちゅ、ちゅ、ちゅっ♡♡♡ ちゅぷぷぷっ♡♡ ちゅむ
っちゅむっちゅむっ♡♡ ちゅ…ッ♡♡♡♡

ちゅくっ♡♡ れるお♡♡ ちゅくっ♡♡ れるお♡♡
ちゅぷっ♡♡ べろお♡♡ べろべろべろべろべろ
……♡♡♡♡♡

私は強張った手足をカタカタと震わせ、

「ん` ッツ、んうう……！♡♡♡♡♡ ン` ………
……ッッッ！！♡♡♡♡♡♡♡♡」

二度目の絶頂を迎えてしまった♡♡♡♡

「これだけおまんこぐずぐずになっていればもういいだろう♡」

「夢子ちゃん、ここまで来たら今更嫌なんて言わないよな？」

「ほら、おじさんたちのちんこ、夢子ちゃん見てたらもうビンビンだからさ♡」

頭がぼーとする♡♡

私は座布団の上で手足を投げ出し、絶頂の余韻にピクピクと体を震わせていた♡

その私の視界にいくつもの、おちんぼ♡♡♡♡♡

生で見るのは初めてだった♡♡

形も大きさも様々だ♡ けれどそのどれもが私に向け

られ、赤黒く膨張して、ときどき脈打ってビクンと跳ねる♡♡♡♡

(……ちんぽなんだ、これが♡♡♡♡♡ これでおまんこ突かれたらきっと、オナニーより気持ちよくなれる♡♡♡♡)

「……ふ♡♡♡ ふう♡♡ ん、ふう……♡♡♡♡♡」
「夢子ちゃん鼻息荒くなってるぞ～？♡ さてはおちんちん欲しいんだな？♡」

おじさんが私の胸をやわやわと揉みながら笑った♡♡
ときどき指が乳首をかすめ、体が跳ねる♡♡

「……ほしい、です♡♡ おちんぽ♡♡♡♡」

私がそう言うとちんぽがいくつかぴくりと反応した♡♡♡

「いい子だ、ちんぽいっぱいあるから存分に楽しむんだぞ♡♡♡♡」

おじさんの一人が私の足の間へ移動した♡♡♡♡

とうとう来るんだ、生のちんぽが♡♡♡♡
オナニーで挿入は経験していたから怖さはない♡
むしろ初めての生ちんぽに興奮しっぱなしだった♡♡
♡♡

「ほら、入るぞ……♡♡ 夢子ちゃんのおまんこに♡♡
おじさんちんぽが♡♡♡♡♡」
「あ…あっ♡♡♡」

入り口に当たった亀頭が熱い♡♡♡♡♡
それは私の愛液を塗りつけるようにそこで蠢き、その
まま入り口を割るように入ってきた♡♡♡♡

ぬちゅ♡♡

「あッ♡♡ あ……、あつい、♡♡♡♡」
「狭いなあ♡♡ あんまりおまんこ使ってオナニーしな
いのか？♡♡ きつく締まってて気持ちいいよ♡♡♡
♡」

ぬちゅ、ちゅ♡♡
これが♡♡♡ ちんぽ♡♡♡
やっぱりおもちゃとは違う♡♡

あったかくて、中から押し広げてきて……、おまんこ
がそれに喜んで広がっていくのが分かる♡♡♡♡

「夢子ちゃん、ちんぽ気持ちいいのか？♡♡」

「とろけた顔しちゃって♡♡♡♡」

見下ろすおじさんたちにそう言われても、ぽかんと空
いた口は閉まらなかった♡♡

舌も脱力して口の端からこぼれ出そうだ♡♡♡

「きもち、いいです……おちんぽ♡♡♡ おまんこ、い
っぱいに、なって♡♡」

「夢子ちゃんが気持ちいいのはおまんこだけじゃないだ
ろう？♡♡」

「ここも一緒に気持ちよくなろうか♡♡」

そう言って両側から二人が、

カリカリ♡♡

勃起したままの乳首を指先で搔いた♡♡♡

「きゃう” ……………！！♡♡♡♡♡」

のけぞる体♡♡

おまんこもぎゅっ♡と縮こまり、中のちんぽを締めて
しまった♡♡♡♡

「こら、そんなに締めたらすぐ射精しちゃうだろう♡
お仕置きだ♡♡♡」

どちゅんっ♡♡♡♡♡

挿入しているおじさんに顔を向ける前に、
硬いちんぽに一気に奥を押される♡♡♡♡♡

「あゝ……！！♡♡♡ ツあゝ、あ♡♡♡♡♡」

じわ♡♡♡♡♡

奥から気持ちいいのが広がった♡♡♡♡

自分じゃそこまでおもちゃを当てたことはない♡♡♡
♡

なんとなく怖くて触らなかったところ、ちんぽに押さ
れている♡♡♡♡

そこを押されると、みぞおちの辺りからくすぐたく
て気持ちいい何かが心臓を押し上げてくる♡♡♡♡

どちゅんっ♡♡ どちゅんっ♡♡ どちゅんっ♡♡
「あっ♡♡ や、待っ、……っ♡♡♡♡」
どちゅんっ♡♡ どちゅんっ♡♡ どちゅんっ♡♡
「あゝっ♡♡ んあっ、あ…！♡♡♡ あああっ♡♡♡」
「夢子ちゃんこっちもだよ♡♡」
カリカリ♡♡ カリカリっ♡♡ カリカリ♡♡
「あゝ ……！♡♡ んゝ ツツ♡♡ ああッ♡♡♡」
カリカリ♡♡ カリカリカリ……ツツ♡♡♡
「あ〜〜〜っ♡♡ ちくびいっしょ、だめっ♡♡ きもち……ツ♡♡♡♡」

しっかりと腰を掴まれ奥をちんぽで突かれ♡♡♡♡♡
尖った乳首は両方とも上下に細かく弾かれた♡♡♡♡
♡

体に広がる快感が深くなっていく♡♡♡

どちゅんっ♡♡ どちゅっ、どちゅっ、どちゅ♡♡ どちゅんっ♡♡ どちゅんっ♡♡ どちゅん♡♡
カリカリカリカリ……♡♡♡ カリカリカリカリ……ツ♡♡♡

「あゝっ♡♡ あ♡♡ あ♡♡ あああッ♡♡ これ、…っ♡♡ きもち♡♡ ちんぽ♡♡ 気持ちいい、…っ♡♡♡」

足が勝手に開いて、おじさんの腰をもっと、もっとと
誘い込んでしまう♡♡♡♡♡

そうしながら鋭い刺激を与えられる乳首も背中を浮か
せて突き出した♡♡♡♡

「大人しい子なのかと思ったけど……、とんだ淫乱だな
♡♡」

どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡

ちんぽのピストンが強くなった♡♡♡♡

どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡

♡

まっすぐ奥まで突き込んで、素早く引いて、また強く
突いてくる♡♡♡♡

どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡

♡ どちゅッ！♡♡♡

「ん ッ♡♡♡ あ ッ、あ♡♡♡ ああッ♡♡♡」

ちんぽの圧に意識を持っていければ、

カリカリッ♡♡ しこっ♡♡ しこっ♡♡

搔かれていた乳首は指の腹で挟まれしごかれた♡♡♡

♡

しこっ♡♡ カリカリ…♡♡♡ しこしこっ♡♡♡ しこ
しこっ♡♡

指先で搔く強い刺激のあとにそれを慰めるようなしご

き♡♡

カリカリッ♡♡ しこお♡♡しこお♡♡ カリカリッ♡

♡♡♡ しこおお♡♡♡

「あ`っ♡♡ うあ、あッ♡♡♡ ……ッ`♡♡ ん`っ♡

♡♡ ううう♡♡」

掴まれた腰を浮かせて夢中になる♡♡♡♡

どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡

♡ どちゅッ！♡♡♡

カリカリッ♡♡♡ しこしこっ♡♡ カリ、カリ♡♡♡

しこお♡♡♡しこお♡♡

どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡

♡ どちゅッ！♡♡♡

カリカリ♡♡ しこ、しこっ♡♡♡ カリカリカリカリ

ッ♡♡♡ しこしこしこっ♡♡♡

「おまんこの奥、さらに狭くなってきたぞ♡♡ ここ、

いいんだな♡♡♡」

「……ッ`♡♡ いい、ですっ♡♡♡ あっ♡♡ あは、っ

♡♡ おく、気持ちいい……！♡♡♡ そこ、……ッあ♡

♡♡」

いつもオナニーではクリトリスをいじるのが定番だ♡

♡

乳首をいじろうがおもちやを挿入しようが、クリトリスを触らないとイケない♡

なのに、

どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡
♡ どちゅッ！♡♡♡

カリカリッ♡♡♡ しこしこっ♡♡ カリ、カリ♡♡♡
しこお♡♡♡ しこお♡♡

どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡
♡ どちゅッ！♡♡♡

カリカリ♡♡ しこ、しこっ♡♡♡ カリカリカリカリッ♡♡♡
しこしこしこっ♡♡♡

「ああアっ♡♡♡ ……ッ♡♡ ん”、く……♡♡♡ ふ、う” うう……♡♡♡♡♡」

おまんこの奥、今までにない感覚がする♡♡♡♡

ちんぽに突かれるところからどんどん気持ちいいのが溜まってって、頭の中が真っ白に塗られていく♡♡♡♡
♡

どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡
♡ どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡
♡ どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡

「あゝ、あ、……ま、って♡♡♡♡♡ これ、」

どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡
♡ どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡
♡ どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡

お腹の奥に神経を集中させた♡♡♡♡♡
このまま、イけてしまいそうだ♡♡♡♡

「イきそうなんだろ♡♡ いいぞ、このまま突いててあ
げるからちんぽでイってごらん♡♡♡ おじさんちんぽ
でおまんこドスドスされてアクメしろ♡♡♡♡」

「あ、あ…………ツ、あ♡♡ ……………、…………っっっ！♡
♡♡♡♡」

どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡
♡ どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡
♡ どちゅッ！♡♡♡ どちゅッ！♡♡♡

ちんぽから送られる快感が全身を包んだ♡♡♡♡♡
そして目がぐるりと上向いて♡♡♡♡♡

「イク、イ、きます、…………アっっ、ああああああ
あ” あ” ツッ！！！！♡♡♡♡♡♡♡♡」

「いい子いい子♡♡♡ ご褒美にこのままクリイキさせてあげような♡♡♡♡♡」

ごしっ♡♡♡♡♡

ごしごしごしごしごしごしごしごしごしごしごしっ
っ！！！！♡♡♡♡♡

「お” ……………ツツツツ！！！！♡♡♡♡♡♡♡♡
♡」

絶頂痙攣している私のお腹を押さえ、横から別のおじ
さんが私のクリトリスを押し潰した♡♡♡♡♡♡

指はそのままその小さな粒をこねくり回す♡♡♡♡♡
♡

ちんぽのピストンも止まらない♡♡ 両乳首をしごく
指は興奮したように激しくなり、付け根から縦横無尽に
勃起を押し倒すように動いた♡♡♡♡♡

ドチュッ！♡♡♡ ドチュッ！♡♡♡ ドチュッ！♡♡
♡ ドチュッ！♡♡♡ ドチュッ！♡♡♡ ドチュッ！♡♡
♡

「お” 、…………♡♡♡ や、やめ、…………！！♡♡ おっ、

ほ♡♡♡♡♡」

ごしごしごしごしごしごしごしごしごしごしっ！！♡♡
♡♡♡

「ッッお”、…………！！♡♡♡♡♡ イってる、イって
るからあ”！♡♡♡」

ぐりゅっ♡♡ ぐりぐりぐりぐりっ♡♡ ピンピンピン
ピンッ♡♡♡♡ ぐりゅりゅっ♡♡♡♡

「ン” お、…………ッ”！♡♡ お” ♡♡♡ お♡♡♡ ……っ
！♡♡♡♡」

みっともない声が喉から込み上げて、私の体は受け止
めきれない快感に反射的に暴れた♡♡♡♡

おじさんたちはその私の体を押さえつけひたすらに私
の性感帯を責める♡♡♡♡♡

ドチュッ！♡♡♡ ドチュッ！♡♡♡ ドチュッ！♡♡
♡ ドチュッ！♡♡♡ ドチュッ！♡♡♡ ドチュッ！♡♡
♡

ごしごしごしごしっ！！♡♡♡♡ ごしごしごしご
しごしっ！！♡♡♡♡♡

ピンピンッ♡♡ ぐりゅぐりゅぐりゅぐりゅっ！♡♡
♡ ピンピンピンピンッ♡♡♡ ぐりゅりゅりゅりゅ
ゅっ！♡♡♡♡♡

いったのに突かれ続けるおまんこは、それでも嬉しそうに締まってちんぽを感じている♡♡♡♡♡

押さえつけられ逃げ場のないクリトリスはめちゃくちゃに擦られて、そこだけがとんでもない熱を持ち、

薄い皮膚を倒されまくる乳首も電流のような快感で背中を痺れさせてくる♡♡♡♡♡

「お” ツツ、おおおお♡♡♡ だめ、です、これ♡♡イ
っちゃうからあ！♡♡♡ こんな♡♡♡ すぐイっちゃう
” っ、イ”、っちゃうううう！！♡♡♡♡♡♡」

「えっる……♡♡♡♡♡ 俺も出すよ、夢子ちゃんのお
まんこに射精する…♡♡♡♡」

ドチュドチュドチュドチュドチュドチュドチュドチュ
ツツ！！♡♡♡♡♡♡♡

ピストンは一気にペースを上げた♡♡

体ごとガクガクと揺らされるから乳首もクリトリスも
余計に刺激されてしまう♡♡♡♡

ドチュドチュドチュドチュドチュドチュドチュドチュ
ツツ！！♡♡♡♡♡♡♡

ドチュドチュドチュドチュドチュドチュドチュドチュ
ツツ！！♡♡♡♡♡♡♡

瞬間、制御できない体が思いっきりのけぞった♡♡♡



■続きは製品版にて♡